

## 「こうすれば育つ 子どもの心」を考えよう

講師：日本道德教育学会 会長 よこやま としひろ 横山 利弘



### プロフィール

兵庫県生まれ。元関西学院大学教授。現在は、日本道德教育学会の会長等を務める。道德教育の第一人者として、全国各地で講演会や指導助言を行っている。温かさとユーモア溢れる語りで多くの人の心を掴んでいる。

平成 25 年度西宮市 P T A 協議会・西宮市家庭教育振興市民会議共催事業 家庭教育講演会の内容をまとめました

### 「心を見る目」が弱っていませんか？

タイトルに「こうすれば育つ子どもの心」とありますが、簡単には出来ません。まずは、心について考えましょう。「心はどこにあるか？」と尋ねると、多くの人が心臓の辺りを押さえるでしょう。心臓が止まれば人間であることを終わったことにする。これが死の定義です。こう考えるのは、心が動かなくなるからです。最近では「心はどこにあるか？」と尋ねると、脳を指す人もいます。この考えが広まってきたため、脳が絶対に元へ戻らない状態を心が動かなくなったとして、人間であることを終わったことにすると考えるのが脳死の定義です。どちらの考えを取ったとしても、人間であるということは「心が動いている」ということです。つまり、心が育つ、心が豊かになるということは、心が動いていることが大前提となっているのです。

さて、心は見えますか？見えませんか？幼稚園の子どもであれば、悪いことをして帰ってくると、

顔や動きに心が表れています。また、中学生くらいになると、わざとポーカーフェイスを装ったりもします。つまり、子どもの心は行動や顔の表情、話し方からある程度は見えるのです。これをきちんと見なければ心は育てられません。私たちはどうしても行動や言葉等、目に見える部分ばかりを意識していますが、本来は子どもがなぜそのような行動を取っているのかということを考えなくてははいけません。しかし、最近では周囲から出来栄ばかりを要求されるので、私たちは表面的な行動ばかりを見てしまい、心を見る力が弱まっているのではないのでしょうか。

### 「教育の秘訣」とは？

皆さんは子どもを無理に理解しようとしていませんか。科学的に理解するのではなく、気持ちを一緒にしながら理解すればよいのです。これを「共感的理解」と言います。時には親が誤解することもあります。その誤解で子どもが育つこともあります。ですから、まずは、我が子は良い子だと

信じてください。教育の秘訣の一つは、自分が相手の中にあると信じたものが相手の中に育つということです。皆さんが我が子は良い子だと思っていると、子どもは良い子に育っていきます。我が子をずるい子だと思っていると、子どもはずるい子に育っていきます。

### 母親は神様！？

「心」というとわかりにくいですが、心を感情の部分と知的な部分と意思の部分に分けて考えるとわかりやすくなります。まず、感情の部分ですが、皆さんの子どもはきちんと感情が動いていますか。幼稚園くらいのまだ感情がコントロールできない頃は、子どもが突然、感情を爆発させることがあります。心配する必要はありません。やがてコントロール出来るようになります。そして、もう一度同じような現象が思春期に起こります。いわゆる反抗期です。しかし、その時期を過ぎるとまた元に戻ります。ただし、反抗期を過ぎても頻繁に感情が爆発する人がいます。そのような人をよくきれる人と言います。きれるというのは情の乱れですので、直すためには基本的に愛情以外に手がありません。愛情を注ぐと人間が生きていく上で一番ベースとなる感情の部分が育つのです。

次に知的な部分です。知的な部分とは、善悪を判断する力です。これはなかなか育ちません。現在、日本社会では、善悪の判断基準がおかしくなっています。このような中で子どもがどのように判断力をつけるのかということは、子どもの心の育ちを発達段階的に捉えるとよくわかります。子どもの心の成長にまず必要とされるのは母親です。乳幼児が安心して過ごせるのは、母親と一緒にいるときだけです。つまり、この時期の子どもにとって母親は神様です。神様は基準を与えることが出来ますので、母親はあらゆることの基準を与えることが出来るのです。子どもが小さい頃の判断基準は、母親が良いと言うことが良いことであり、悪いと言うことは悪いことになります。これは明

確に教えてください。どんな母親も自分の考えが絶対に正しいという自信は持てないと思いますが、あまり気にせず、自分が正しいと思うことを子どもに伝えてください。心配しなくとも、子どもはその判断基準を持って大きくなりません。人間は青年期に一度それまでに教えられてきた基準を全て壊します。そして、自分なりの判断基準を作り上げていくのです。しかし、そのときに必要とされるのは、小さい頃の経験です。

### 父親の出番

祖父母や地域が総がかりで子育てをしていた時代は、母親の負担が比較的少なかったのですが、核家族化が進み、地域の繋がりが希薄化する中、子育てに関わるのはたいてい父親と母親だけになってきました。しかも、母親一人の責任のようになっていくことが少なくありません。これは良くない傾向です。母親は父親に「手伝って。」と頼むことが大切です。子どもは幼稚園に通うようになる頃、母親が父親に頼む姿を見て、母親を神様ではなくただの人間だと思えるようになります。そして、友達に父親の自慢をするようになるのです。このときこそが父親の出番です。父親はきちんと子どもと一緒に過ごす時間を作らなければいけません。すると、判断基準は父親へ移ります。これは大切なことですので、母親は自分でやる方が早いと思うことでも、子どものためを思って父親に頼んでください。

### 子どもを仲間ごと育てる

その次に判断基準を与えることが出来る存在は、幼稚園の先生へ広がっていきます。幼稚園から小学校1～2年生までは子どもにとって具体的な人間、つまり先生が神様であり、基準を与える存在です。その後、小学校3～4年生になると、大きな変化が起こります。子どもの判断基準が先生から仲間に移るのです。子どもはことある毎に「みんな」と言い出します。子どもにとって「みんな」とは、自分の仲間のことを指しており、その他大

勢のことを指しているわけではありません。ですから、子どもが名前を挙げる子はその子の育ちの場において一番大切な人ということです。この頃になると、子どもは仲の良い子の家を行き来するようになります。そのときは、自分の子どもだけではなく、仲間ごと育てなければいけません。やがて子どもが中学校に進学する頃になると、仲間と繋がるだけでなく、仲間の中にいながら自分なりの基準を作ろうとし始めます。これが自立です。このように心は発達段階に応じて育っていくのです。

### 質問のいたちごっこ！？

次に、知の部分、つまり判断力についてです。小学校3～4年生の頃は仲間と一緒に意見に流れやすいため、悪いと思っけていても悪い方へ流されてしまいがちです。しかし、そのようなときに、仲間の中で「やめよう。」という一言が言える子どもを育てなければいけません。今、その一言が言える子どもを育てられていないのではないのでしょうか。いじめは、みんな悪いことだと思っています。しかし、みんな一緒ということで止められないケースが多く見られます。判断力の育て方は非常に簡単なことです。子どもが幼稚園に通っている頃は、親が善悪の判断を教えなければいけません。子どもが小学校に進学してからは、子どもに「それでよいの？」と尋ねるようにしてください。これは中学校に進学しても同じです。例えば子どもが宿題をしないとき、「何で宿題をしないの？」と理由を聞いても無駄です。子どもは言い訳をするだけです。また、「それでよいの？」と聞いたとき、「よくないと思う。」と子どもが答えると、私たちは「じゃあ、これからどうするの？」というように、すぐに行動にすり替えてしまいがちですが、これもいけません。知的な部分を育てようと思うならば、どこまでも追及しなければいけません。「それでよいの？」と聞いて「よくないと思う。」という答えが返ってきたら、「宿題しなかったら何でいけないの？」「約束だから。」「約束を破ったら何でい

けないの？」「信用がなくなる。」「信用がなくなったら何でいけないの？」というように質問を続け、子どもに考えさせるのです。子どもが「もうわからない。」と言えれば、「よく考えたね。そこから先はまた自分で考えなさい。」と言ってあげてください。これを繰り返すと、子どもが自分で考えたことですので、子ども自身のものになっていきます。親が子どもに与えたものは子どものものにはなりません。

### 本当に良い誉め言葉とは！？

最後に、意思の強い子はどのように育てるのでしょうか。これも簡単なことです。出来栄を誉めないことです。親が出来栄だけを誉めると、始めから出来ることしか取組まない子どもになります。子どもが頑張っているところをきちんと見て、努力していること自体を誉めてあげてください。そうすると、難しいことにチャレンジ出来る子どもが育っていきます。意思の強い子どもはチャレンジする精神があつて、強くなっていくのです。親が他の子どもと比べてばかりいると、言い訳する子どもになってしまいます。「上手に出来たね。」と誉めると上手にすることしかしません。同じことをしていても「よく考えてやったね。」と誉めると、考えてやるのが大事だということが自然と身につきます。

### 子どもと過ごす時間の大切さ

親と子が一緒にいる時間を子どもには多く経験させてください。これは、人間が健全に大きくなっていくために不可欠の条件だからです。そして、子どもと一緒に楽しんでください。親が勉強のことだけを尋ねると、子どもは逃げます。勉強ばかり追いかけて、小さいときから子どもと一緒に楽しんでいると、子どもの方から勉強についても聞きやすくなります。子どもの生活は次第に親から見えなくなります。見えなくなってしまうから色々心配するよりも、日頃から親子で一緒にいる時間を持っていれば、見えない部分が少なく

なっています。

皆さんはどうも子どもに何かを教えようという気配が濃厚です。子どもが小さい頃から、親が教えようとしすぎると、しんどくなります。子どもが中学校や高校へ通うようになって、親が教えなければいけないからです。それよりも肩の力を抜いて子どもと一緒に楽しみましょう。すると、勉強のことも「これどう思う？ 私はこう思うけど。」などと子どもに気軽に話せるようになります。学校の授業のように時間内にここまで教えなければいけないと思わないでください。子どもが飽きたら、そこで終わりです。子どもにとって、わかりきった話は面白くありませんが、難しすぎてもやる気がしません。これは勉強も同じです。簡単に出来る勉強は面白くありませんが、壁が高すぎるとやる気がなくなります。子どもは少し高い壁を乗り越えたときに嬉しさを感じるのです。親子でそういう経験をしてください。

### 子ども自身の力でイメージする

人間は経験しなくとも想像できる動物です。想像力が育たなければ、自ら進んで行動することは出来ません。ただし、全ての始まりは気づく力です。気づきのある子どもは基本的に優しい子です。人間はベースに優しさを持っていますが、気づかなければ優しさを発揮することは出来ません。子どもが気づいたときはよく誉めてあげてください。その上で、想像する力、つまりイメージ力を高めてください。勉強が出来る子は、イメージする力が強いのです。初めから頭に映像で入ってしまうと、すぐに理解は出来ませんが、頭には残りません。様々な知識が子どもの記憶として残っていくのは、子ども自身の力で映像化させたときです。

さらに、頭が良い人は、まず、見る力を身につけています。これは気づく力とも言えます。同じものを見て気づいたり、違いを見分ける力がつけば、次は考える力です。考える力とは、イメージ

する力です。ですから、子どもがイメージできるような授業や教材を与えると、考える力がついていきます。そして、最後が覚える力です。この順番で身につけなければいけません。覚える力だけを伸ばそうとするので、頭が良くなるたす。記憶力はある年齢で急激に落ちます。その代わりに思考力が伸びていきます。基本的なことを覚えさせるということはとても大切なことです。記憶力が非常に優れている幼稚園や小学校1～4年生のときは、覚えさせれば良いと思いますが、高校に入る頃には覚える力よりも考える力でカバーしなければいけません。そのとき、物事をイメージ化して捉える力が非常に大切になるのです。

### 子育て世代の皆さんへ ～メッセージ～

今、子育てがしんどいと思われている方がおられるかもしれません。しかし、我が子と一緒に過ごせる時間は、長くはありません。高校生くらいになるとすぐに離れていきます。気持ちの上でつながっていても、一緒に様々なことを話したり、戯れたりする時間は人生の中でそう長くはないのです。子育てをしんどいと思わず、楽しんでください。

### 命の大切さを感じ、考えよう!!

～次回の家庭教育講演会のお知らせ～

平成25年11月29日(金)10時より、勤労会館ホールにて家庭教育講演会を開催します。

講師にマナ助産院 永原郁子院長をお招きし、「命の大切さ」をテーマにご講演いただきます。

詳細は後日、市政ニュースなどでご案内しますので、是非ご参加ください。